

# 石垣の中の博物館

## 仙台城の調査から

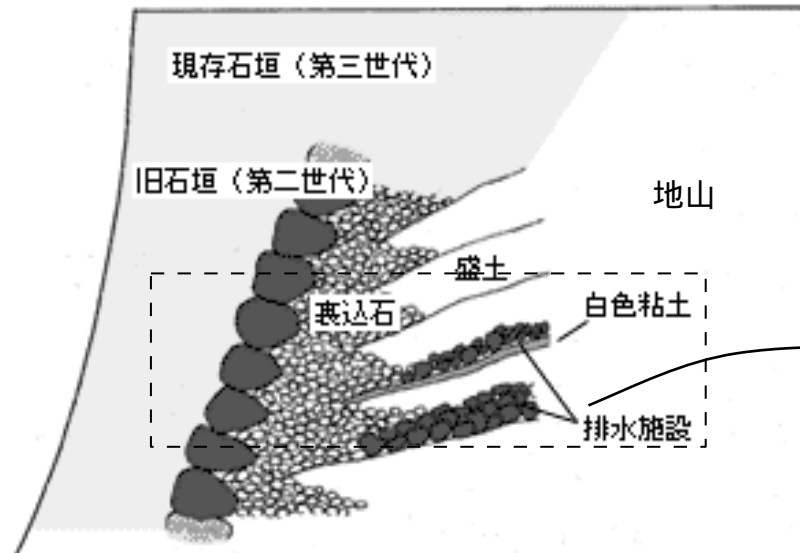


図1 断面模式図（左側が北）



図2 出土状況（東より）

## 石垣の排水施設を発見

図3 出土状況（南側調査区の上から）

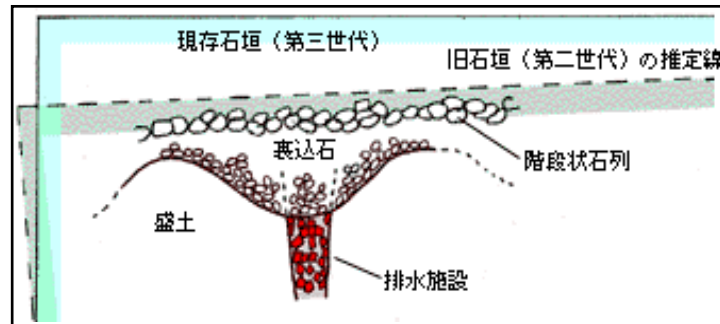


図4 平面模式図

現存石垣（第三世代）  
 旧石垣（第二世代）

石垣背面には盛り土がなされている。層状に積まれた盛り土の一部に、不透水層を貼ってその上に河原石を敷き詰めている。

仙台城の石垣の調査では、すくなくとも3つの画期のあったことが判明した。それはいずれも、仙台平野近辺を震源とする大地震による崩壊に起因することが、遺物の年代観と文献史料からほぼ確かめられた。

そうした歴史的事実のほか、この調査が今後の近世城郭を研究するうえで画期的な成果をあげている。それは江戸時代の土木技術、とくに石積み技術についての新知見を提供していることである。意外と思われるかもしれないが、明治時代以前の土木史というものは、とくに技術面においては不明な点が多いのである。その理由としては、土木技術が発展的継承されにくいものであることが大きいように思われる。

仙台城の調査は、そうした間隙を埋めていく端緒となる画期的事例となりうるものである。

図1；不透水層は水を通さないのので、石垣背面にしみ込んだ水は河原石の充填された層を通り、栗石層を経て石垣表面に排出される仕組みになっている。

図4；本丸表面の水は角礫で作られた暗渠に集まり、河原石の排水施設に導かれる。原理としては、土塁構築の基礎地業に見られる「敷粗朶（しきそだ）」工法に共通しそうだ。

この大掛かりな排水施設が、この位置で見つかったのは、近世の仙台城築造にあたり、谷を埋めて石垣を構築したためと考えられるということらしい。本丸に降った雨は当然、この旧谷筋に流入し、大きな力となって石垣に負荷を加える。その水の力を弱め、どのように逃がすのか、当時の土木技術者の腕が問われた場所だったのだろう。姫路城三国堀も、この視点で捉え直す必要があるだろう。



図5 階段状石列の残存状況

1999年8月末時点の状況。調査が進み、だいたいの石は外されている。栗石よりも大きな、積み石になりうる大きさの石を階段状に積んでいる。石垣構築の際、その内部に石を積んで埋め込み、石垣の強度を高めるものか。金沢城、肥前名護屋城、丸亀城などでも同様に、「内部石垣」の遺構が出土している。

【図版出典】

図1、2、4 <http://www.city.sendai.jp>より



「城踏」の様子